

II. 実践研究の報告

4. 村山中藤保育園（東京都 武蔵村山市）

1. 研究テーマ

延長保育・一時保育の研究

2. 保育園名

社会福祉法人 高原福祉会 村山中藤保育園

3. 研究代表者

主任保育士・若山 望

4. 保育園の所在地

東京都武蔵村山市中央 1-28

5. 定員数

定員 250名

入所児童 0歳児 22名 1歳児 35名 2歳児 46名

3歳児 50名 4歳児 50名 5歳児 52名 合計 255名

6. 沿革

昭和 44 年認可

0歳児保育、障害児保育、延長保育、一時保育

地域交流事業、子育てセンター併設

延長保育、一時保育を始めた動機

当園では特別事業としての認可を受ける前から、家庭の事情により保育に欠ける子どもたちのために必要と感じられた手助けは行ってきました。平成 8 年度の改築工事をきっかけに東京都と話し合いながら先駆的に始めました。当時、一時保育は子育てセンターの事業として取り入れ、この地域ではまだまだ子育て支援に対する社会の取り組みは少なく、様々な事情での利用者が多くありました。子育てセンターの職員は少なく、利用人数に対して安全に預かることへの配慮に苦慮して参りましたが、平成 11 年度より保育園内の事業に変わり安心して預かることが出来るようになりました。

また、延長保育に関しては、核家族が多くなるにつれ仕事と育児の狭間で苦勞している保護者を見てきてその必要性を感じ、制度の取り入れは積極的に行いました。

研究の目的・概要

目的・・・当園での延長・一時保育の実態を改めて見直し、子どもの健やかな成長のための援助、保護者への支援が本来望ましい子育て支援になっているのかを見つめなおしていく。

概要・・・実態の把握としてそれぞれの保育の状況、配慮点をまとめてみる。

保育の中で感じていることをまとめてみる。

利用者の親子の状況で気になる点への対応をまとめてみる。

研究スタッフ

若山 剛 堀田史朗 長塩和子 小山みどり 田中直美 駒屋暁子
渡邊満夫 柴田絵津子 近江信子 若山 望

研究の方法・研究会議の状況

方 法・・・利用状況のまとめ・配慮事項と子どもの様子のまとめ子育て支援
という立場から感じることのまとめ

会議の状況・・・8月 調査内容の説明・方法の打ち合わせ

子どもの育ちや情緒面・親子関係に視点をおくことも考えましたが、“必ずしも延長保育や一時保育の利用との関連性があるとは考えられない”との話し合い結果となり、状況のまとめやその結果から感じたことをまとめてみることを主とすることにしました。

9月から11月

・延長保育では、延長時間中の個々の子どもへの配慮や受け持ち担任との連携・保護者の様子など記録していく

・一時保育利用者に関しては、記録用紙をつくり子どもの姿、保護者の様子を記録していく。

*保護者アンケート配布（子育てに関するアンケート）

12月 記録のまとめ・感想のまとめ

研究の実施状況

延長保育

[利用状況]

利用受付について

家庭状況の把握を充分に行い、その必要性をしっかりと園側もつかんでから受け入れています。また保育時間が全体的に長くなる子や保育園での生活にまだ慣れていない子ども・0歳児などは子どもにとっての影響（健康面、心の育ちなど）をしっかりと考え、保護者と相談しながら無理なく進めていくようにしています。

延長保育で気をつけていること

・家庭ではくつろいでいる時間帯なので、精神的にリラックスしてのどかに過ごすことを心がけています。身体も休めるよう、寝転がれたり腹ばいで遊べるような環境も意識的に作っていきます。またユーモアや笑いも、ほっとできるひと時として大切にしています。

・一人一人の子どもが安心して遊べるものを用意していますが、0歳児から5歳児までいるので、発達にあった遊びを心がけています。空間が一緒なため、

小さい子が大きい子の遊びに関心をもち満足して遊べない状況が起きがちです。あえて似たようなもので同じようにやっている気持ちになれるものを用意したり、時にはタイミングを見計らって、大きい子に小さい子を思いやれるよう声がけしたりもしています。安心して遊べる心のゆとりを常に気をつけています

・情緒的に気になる様子は、担任に聞いたり主任と相談しながら家庭との連携もとっていくようにしています

担任との連携をとりながら進めていった事例

0歳児（満1歳）

『子の様子』

・開始当初は食事があつたり、目新しい玩具などがあり、探索行動も活発で特に不安を示すことはなかった。

・最近になり、色々と理解し始め、周りが見えてくるようになってきたことで、不安になることが多くなってきた。

・延長の部屋で落ち着いても、クラスの慣れた担任を見ると泣き出すことがあった。

・延長の部屋に来るときに泣いてしまうこともある。

『考えられる要因』

・ひとつの部屋に0歳から5歳までの子どもたちがすごしているため、0歳児クラスの子にとっては、動きも多く、騒がしく落ち着いて過こしにくい環境にある。

・延長の部屋には0歳児のクラスに入っている大人がいないため、慣れた大人がいないことへの不安がある。

『延長保育での関わり』

・延長開始から同じ保育士が一人ついて、関わるようにした。

・担任から引渡しするときも不安定な時はしばらく担任がついて、食事などを取るようにした。

・周りの子には小さい子が一緒にいることを伝え、遊び方など配慮していった。

・落ち着かず、不安定なときは部屋を離れて、静かなところで過ごすようにしていった。

・担任から朝や昼の食事や睡眠の様子を聞き、不安定の原因を多方面からも見ていった。

2歳児、5歳児の兄妹

『子の様子』

・妹の方は初日に少し不安そうな表情をしていたが、兄がいることや他の子達とも多少の関わりがあったためか、その後は不安を示すことなく過ごす。今は

自分から「今日は延長」というくらいなれて、楽しめている。

・情緒面でも利用当初は泣いて登園することもあり、朝の受け入れを十分に安心できるよう担任の方で配慮していった。最近は泣かずに登園するなど、落ち着いている。

・兄の方は年長ということもあり、特に情緒面の変化は見られず、楽しんで過ごしている。

特別な事情で利用し保護者を支えていった事例

0歳児

『利用となった事情』

・兄3歳児が入院し母親は付き添い、父親は仕事が遅いため必要となりました。

『配慮していったこと』

・急な利用のため、初めは無理に延長保育のお部屋で過ごすことは考えず、担任が残って預かっていきました。

・徐々に担任と一緒に延長保育室に行き、延長の担当保育士にも慣れていけるようにしました。

・母は精神的に疲れて迎えに来るので、出来るだけお迎え時には機嫌よく速やかに帰れるよう、オムツの汚れの確認を済ませておくなど気をつけていきました。

保護者・地域社会等の反応、評価

2つ目の事例の保護者は、この制度の有難みを充分に感じたようで、兄の退院後感謝の気持ちを伝えにきました。また、資格取得の研修のため短期間利用したり仕事上急に利用しなければならなかったなど、身近に協力を得られる方がいない家庭ではとても助かっているようです。

仕事で毎日のように利用している家庭、忙しい時期だけ利用している家庭、利用の仕方は様々ですが、仕事と育児の両立を上手に行っているようです。

時には時間ギリギリになりあわてて迎えにくることがあります。当園での時間に対する対応の厳しさに不満を感じる声もあがりますが、自分勝手な振る舞い・考えは社会の中で生活していく上で好ましくありません。“お互い様、思いやりの精神”の大切さを根気よく保護者に伝えていく中で徐々に理解していつてくれているようです。

職員の協力体制

事例にもあがっているように職員間での協力は不可欠です。“子ども一人一人にとって大切なこと”“そして私たちはそのために仕事をしていること”という共通意識を常に職員同士で確認しあっているため、その都度あがってくる家庭の事情、保育上の問題点については、子どもを中心に話し合いが進められ、連携に対する理解も得られています。時には子どものために一人の保

育士が延長保育室に入るため、クラスから抜けてしまう体制になると、他クラスから別の保育士が掃除に入るなど、みな快く助け合っています。また、日中の食事の様子から延長食への配慮が必要なときには給食職員に協力を得たり、体調がすぐれない、怪我への対応など看護師との連携も取れているため安心して預かっています。

担当保育士の意見

延長保育の利用者は徐々に増えてきています。それだけ、フルタイムで仕事をする方が多くなってきているのだと思います。しかし、中には延長保育を利用するには料金がかかる為か、なんとか18時までの迎えをと頑張っている保護者の方も見られます。申請していないが18時を過ぎてしまう方については、あまり遅くなるようであれば子どもの生活リズムを考えて、保護者の同意を得て延長保育となり、食事をして待つようにしています。

時間に間に合わせようと息を切らせて急いで迎えに来る方々を見ていると、「仕事場からこんなに急いで、事故に遭わなければいいが大丈夫だろうか。」と心配になる事もあり、思わず「大丈夫ですか。」と声をかける事もあります。大変そうな様子が見られ、あまり遅くなる日があるようならば、保護者と話し合い延長を勧めることもあります。そのような、ぎりぎりの時間の迎えを待っている子ども達は不安を感じ「ママ来る?」と聞いてきます。

子ども達の不安を少しでも和らげられるように、保育士がついて一緒に遊び、安心して迎えを待てるよう子ども達の気持ちに配慮していますが、落ち着かない様子は見られます。

また、延長の申請をしているが、時間ぎりぎりまで延長前に迎えに来たり、18時を過ぎてしまい延長に行ったが、食事を始めたばかりで迎えが来てしまったりという子は、延長に行く事を嫌がり、「お母さん来るからここで待っている。」と言う子もいます。保護者も少しでも早く仕事を終えて迎えにと思い、急いで来てくださるのでしょうが、子ども達にしてみると中途半端な時間での迎えとなりますので、あまり嬉しくないようです。

その反面、いつも延長を利用している子は、この時間を楽しみにしている子も多いようです。18時になると荷物を持って延長の部屋に移動し、軽く食事をした後は遊びながら保護者の迎えを待ちます。

室内遊びも時間外保育(16時30分～18時まで)に続いてとなりますので、同じ内容にならないように、この時間だからこそ取り組める遊びをと工夫しています。一日の疲れが出てくる時間でもありますので、ちょっとしたことが大怪我につながる事も考えられます。0歳児から5歳児までがいますので、年齢に合わせてどの学年の子ども達も楽しめるよういろいろな遊びを用意し、室内で落ち着いて遊べるように配慮しています。延長保育の部屋は和室にな

っていますので、家庭的な雰囲気の中で迎えを待ってられるのも落ち着ける要因になっているように思います。幼児は日中も縦割りの生活をしていますが、この時間はさらに乳児も加わっての異年齢での生活となり、より親近感も持てるようで、幼児が乳児の面倒を見るような姿もあります。

0歳児については出来れば早い迎えをお願いしたいのですが、保護者の仕事の都合上、仕方の無い場合は受けています。ですが、やはりいつもと違う環境に大きい子ども達以上に不安定になりますので、慣れるまでは担任も入って過ごすような事もしています。

延長保育の時間は、保護者の迎えを待つほんの少しの時間ですが、次々と友達が帰る中、迎えを待つ子どもの気持ちを考え、少しでも安心して過ごせるよう楽しい時間となる工夫が大切ではないかと思います。毎日のように延長保育を利用している幼児でも、時には早く迎えに来て欲しいという思いを保育士に言う子どももいます。そんな気持ちを受け止め、保護者にもそのような思いを持っている事は伝えることもあります。仕事が早く終わった時には少しでも早く迎えに来て、子どもとの時間をつくってあげて欲しいと思います。

最近では親と子の会話が無くなり、小学生でもほとんど話をしないという子どもがいるという状況の中、親の働く環境は整っていくが益々親子で過ごす時間が少なくなるというのでは、悪化の傾向にあるのではないかと心配になります。保護者の方が働きやすいように環境を整えていく事も大切だと思いますが、その裏で子ども達の気持ちが無視されて、犠牲になっているのではないともなりません。

どんなに子ども達のことを考えた保育内容であっても、親の代わりにはなれないのですから、やはり子どもの事を第一に考えて行っていく必要があると感じています。

研究結果のまとめ・今後の課題

今回の研究を通して、延長保育はまさに家庭での保育の補完であることをあらためて実感しました。子どもにとって望ましい環境を限られた保育園という環境の中でどれだけ家庭に代わることが出来るのか、常に追求しながら今後も取り組んでいきたいと思います。

そして忙しい保護者に育てられている子どもたちの心、厳しい状況の中やむを得ず保育時間が長くなってしまった子どもたちの心を出れる限り受け止め、愛情もって保育していきたいと思います。

時にはそんな子どもの立場から保護者に伝えていかなければいけないこともあります。その際は保護者の立場も考え、思いやりをもったかかわりの中で「子どもの健やかな育ち」のために一緒に考えていきましょう。」とい

う姿勢で、今のこの発達期の大切さを充分に感じてもらえるような接し方を工夫していきたいと思っています。そのためには保護者一人一人の日々の生活状況の把握・性格なども加味していかなければなりません。“子どもたち一人一人のために”という共通意識をもったこの素晴らしい職員間を大切に、これからも本当の意味での子どもたちのための育児支援のひとつとして、この延長保育を考え励んでいきたいと思っています。

研究の実施状況

一時保育

[利用状況]

利用の受付について

まずは依頼の相談が入った時点で、利用の必要性をよく聞くようにしています。その際に一番気をつけていることは、穏やかに対応しながら、本当に一時保育の支援が必要かどうかを話の中からよく掴むことです。親の都合や身勝手な思いで子どもを預かってしまうと、結果的に親子関係が心配な状況になってしまうからです。判断に迷うときには直接会ってから相談するようになり、リフレッシュなどの心因的な要因が加わっているような時には、一人で対応せず園長や理事長などにも話を聞いてもらうようにしています。

手続きを行う時には、面接という形で子どもと一緒にきてもらい、家庭の様子（簡単な生育暦・食事、排泄、睡眠などの様子・家庭での遊びなど）を詳しく聞きます。また子どもにも「ママ・パパがお出かけのときに、ここでこの先生と遊んで待ってようね。」と声をかけながら少しでも安心してもらえるように接していきます。

また、持ち物の説明や、集団の中で預かることの説明も十分に理解してもらえるように話すことも心がけています。必要な保育時間が初日から長い時間になりそうな時には、子どもの情緒について話して慣らし保育の必要性も理解してもらうようにしています。勿論、母親の入院などの緊急性の高い事情の場合には相談後そのまま預かることもあります。その際は子どもの情緒面にかなり配慮した保育を心がけます。

一時保育で気をつけていること

- ・集団に慣れていないため、園内の危険に関する約束事にも慣れていないので、安全面は第一に気をつけています。
- ・慣れない場所・人の中で生活することになるので、情緒面への配慮も大切です。不安を十分に受け止めながら少しでも安心して過ごせるよう、一人一人の心にしっかりと目を向けて関わるように心がけています
- ・時々しか来ないので信頼関係がづくりにくいです。せっかく慣れても、間

隔が空いて、また十分な気持ちの受け止めが必要になってしまいます。

常に子どもの今の姿に心を向けていくようにしています。

- ・保育者間の連携も不可欠です。子どもの状況を伝え合い、園児にとっても、一時保育利用児にとっても最善の方法で保育できるよう連携をとっていきます。

一時保育の事例

事例 1

発育（食事、離乳のすすみ）を援助していた（Aちゃん）H16.7 生まれ

（理由）就職面接

（保育室）0 歳児

（様子）

登園は泣くことが多かった。室内にはいると周りの様子をじっと見ていた。慣れるのは早く、初日から声をあげて笑うこともあり、以降もずっと遊びが落ち着いていて自ら意欲的であった。入眠も落ち着いていて充分眠れた。食事に関しては 4 回目にしてやっと少し食べた。家庭の様子ではビン詰めのベビーフード（味付き）のものを食べさせている様子だったので、園でも柔らかめのお粥にして頂くが、スプーンには興味を示すものの、口に入れるのはとても嫌がっていた。はじめて口にしたものはパン、チーズ、ブロッコリーであった。家ではドロドロとしたものを食べているせいか、咀嚼が上手ではなく、舌ですりつぶすようにして食べていた。その子の食事時間も考慮しながら、時間をずらして食べさせてみるなど臨機応変な対応をした。食べなかった時はミルクを飲ませるようにした。

事例 2

親育てとなっていた事例（Bちゃん）H16.5 生まれ

（理由）仕事

（保育室）0 歳児

（様子）

登園初日からずっと落ち着いており、時折笑顔も見せる。

ミルクもスムーズによく飲む。

入眠は泣いてぐずることが多く、眠っても 30 分ほどで目覚めてしまう。しかしオンブすると一時間ほど眠ることができた。入眠時はじめは不安だったのか、眉間にしわが寄っているなど神経質なところが見られていた。大人のスキンシップを好みよく笑ったりする。また繰り返し関わることで、徐々に玩具に手をのばしながらひとり遊びもできるようになりつつある。大人が側から離れると不安がることが見られる。

経験がないのか腹這いはつらそうである。お座りも不安定。だができるだけ玩具で興味を引きながら、腹這い遊びも心がけている。託児所の一時保育を利用していた。かんしゃくが強いので病院に行って欲しいと言われ、母が悩み相談。こちらの一時保育に変更。時間のルーズさ、荷物を預かって欲しいなどの身勝手さがでてくる。社会のルールを伝え勝手な行為について理事長、園長より話。その後、再度話し合い、現在も利用を続けている。

事例 3

センター担当者との連携（Cちゃん）H14.12 生まれ

（理由）通院、仕事

（保育室）旧園舎 1 階、1 歳児

（様子）

登園はかなり大泣きで、嫌がることが続いた。又、遊びに誘っても泣きつづけて、落ち着くまでに期間を必要とした。

集団は難しかったので、大人との個々での対応を重視していくことにより徐々に落ち着く時間も増えてきた。（はじめの 2 日間はセンターの先生に関わっていただく）

切り替わりで泣いて不安がることもあったが、少しずつ慣れ、心を開いていく。大好きなままごとをきっかけに室内でも落ち着いて遊べるようになると共に、大人との媒介の中で、友達とのやりとりも見られてきた。心が安定すると、大人が側を離れても平気なときが増えていき、集団の雰囲気の中でも過ごせるようになった。表情も笑顔が多く、言葉もよく話せるようになった。食事も嫌がっていたが、5 日目にして食べ始め、おかわりもよくするようになった。排泄も心の安定と共に、他児の様子を見て自らオマルに座りたがるなど意欲的となる。

事例 4

センター連携（Dちゃん）H14.8 生まれ

（理由）仕事

（保育室）1 歳児、旧園舎 1 階

（様子）

登園、大泣きする日が続いたが、5 日目くらいから徐々に落ち着く。集団の中では不安になりやすかったので、静かな旧園舎で対一（担任）の関わりをしていく。徐々に遊び場も広がり、外でも長い時間遊べるようになってきた。思いだし泣きも慣れていくうちに減って、次第になくなる。担任の側にいることで安心感を待っているところはあるが、集団の雰囲気の中でも落ち着いて過ごせるようになった。また笑顔も見られてくる。

心の安定と共に食事もよく食べるようになったが、食べさせないと食べないところもある。

睡眠も、始めは緊張していたのか眠れないこともあったり、40分程度で目を覚ましては泣いたりすることがあったが、よく眠れるようになる。

排泄、おむつの交換も嫌がる事があったが、徐々にスキンシップを楽しみながら受けられるようになってきた。

一度不安定になると尾を引きやすいので、担任が不安定になる前に関わった。今は安定して利用している。

事例 5

親子共に見守りながら総合的に支援している (Eちゃん) H14.10 生まれ

(理由) 通院

(保育室) 1歳児

(様子)

登園、泣いたり緊張は少なく、全体に落ち着いている。

食事は偏食が多く、ムラのある食べ方、ほとんど食べないこともある。

家庭でも困っているという話を聞いた。座っていられず、すぐにたち歩くので一対一で関わる。

おむつ交換は嫌がらない。

睡眠は家庭ではしているとのことだが、園では興奮しているのか毎回寝ないで機嫌良く遊んで過ごす。

生活、遊び全般、行動に落ち着きを感じられず多動、遊びに対してもあまり興味を示さず探索行動が多かった。回数を重ねていくことで、ブロック組み立て、三輪車、ミニカー、ままごと、木製パズルなど集中できるものが増え、落ち着いて遊べるようになっていった。

声は出すものの言葉としてはほとんど聞かれなかったが、「だっこ」「マミー」「ピーポー」「ない」など後半少しずつが出てきている。表情も笑顔が多くなった。大人へのこだわりはなく、担当でも担任でも平気である。

母親より、連絡票に家でいたずらが困るとのコメントがあった。

お迎えを見ていると、関わり方がうわべだけ、注意するだけで子どもに伝わっていない様子うかがえた。

「子育てセンターでの育児講座」があったので声をかけると参加していた。その後は関わり方を変えているとの話を聞き安心した。またぜひ参加したいとのことであった。

事例 6

子の育ちを心配している事例 (Fちゃん) H13.6 生まれ

(理由) 看護

(保育室) 2歳児

(様子)

初月のみ緊張気味だったが、その後はずっと落ち着いた登園である。

- ・食事、偏食気味で促しても食べない。メニューによってはたまによく食べる。

- ・入眠、一度促してみるが不安定になる為、遊んでお迎えを待つこととする。

- ・排泄、誘って行ったり、自ら行くこともできる。(便もする)

- ・遊び、パズル以外は、集中せず、他の遊びも持続しない。また多動で落ち着かず乱暴な行動や突然の大きな奇声、興奮しエスカレートしたり、突然、物を投げたりなど突発的、衝動的な行動が多い。

- ・ルールに対しても、なかなか入らず、一対一の関わりでは、視線が合わない事が多い。

- ・今はなくなってきたが、一時期、チックなような症状がみられた。

- ・センターで顔見知りだった園児と共に行動することが多くなってきた。その他、大人を相手に遊びたがる。

その他 (子の様子)

- ・哺乳瓶から飲むのが初めてだったためか、吸い始めるまでの時間が掛かっていた。

- ・他児が気になるようで髪の毛をひっぱったり押したりなど激しい関わりが続いたり、突然大声をあげて奇声を発したりすることもあった。日がたつにつれ独歩ができるようになるなど動き回れるようになると共に、奇声もなくなってきた。

- ・お座りした時の足の指(左足)に力が入り、固くなっていることに気づく。主任、看護師にもみてもらおうと左右の足の大きさが違ったり、ふくらはぎの太さなども違っていた。特に保護者に伝えず、園の方で保育では足の運びなどを援助しながら様子を見ていった。一ヶ月くらいあき、久しぶりになると遊び込めない程、不安定になってしまった。

- ・後半は甘えも出てきたのか、家庭と同様食べさせないと食べなくなった。

- ・テラスで関わり食べられた。

- ・集団の中で話を聞く場でも走り回ったり、立ったりが多く、落ち着かない部分もあった。

- ・偏食が多い。

- ・しばらくはオムツであったが母親と相談し、パンツに切り替えていく。

- ・入眠時、家庭ではおしゃぶりを使っていることもあってなのか、園で

はその違いや雰囲気の違いからか必ず寝る前に少し泣いてしまう。

保護者・地域社会等の反応、評価

一時保育事業を始めて 7 年になります。初めのうちは預かる事情も吟味していましたが、そのうちどんな事情でも預からなければいけないと言われ始め、子どもにとってどうなのか？親子関係はこれでよいのか？と子育て支援として考える上で矛盾を感じる日々が続きました。そのうち本来の子育て支援をしていく上での一時保育のあり方についての方向性が見えてきて、今では落ち着いた事業になってきています。

しかし、社会的にはまだまだ「どうしてなんでも預かってくれないの？これが一時保育なの？」と言われてしまうこともあります。子どもにとっての最善の方法、親子にとって先を見通した本当の必要性を訴え説明し続けていくうちに、この地域の中では“ここの保育園で預かってくれる事情なら子どものためにも大丈夫！親としても安心していただける”という声がやっと聞かれるようになりました。

相談事業と合わせて対応しながら、時には子どもを連れて行く方法やちょっとした配慮の仕方を伝えたり、親戚の手助けを借りて育児をしていくことの大切さを伝えていくこともあります。逆に相談として来た親子に一時保育を薦めてみるなど、事情内容・親子の状況に合わせて最善の支援方法を考えて対応するようにしています。

子どもの育ちを第一に考え、子どもの健やかな成長につながる支援こそが本来の育児支援であると考える当園の姿勢が、少しずつ広がってきているようです。

職員の体制・協力

当園の一時保育は、基本的に預かる子どもと同年齢のクラスの中で保育しています。家庭にいる子どもも園児も基本的には平等に保育を受ける権利をもっているのではないかと、という法人の考えで行っています。

また、子どもにとっても同年齢の子どもたちと過ごすことはとても魅力的なようで、慣れてくると大人を頼らず子ども同士で楽しそうに過ごしています。親にとっても、我が子が同じ年齢の子どもと関われることに喜びを感じるようです。在宅で過ごしていると、順調に育っているのか、同年齢の中でどのようにかかわれるのかという親としての不安を持っているようです。預かった時間の様子を伝えることで、その姿を確認でき、安心して様子がよく分かります。

同年齢のクラスの中で安心して過ごせない場合は、一時保育担当の保育士が空いている部屋で別に保育することもあります。それぞれの子どもに合わせて、よりよい環境を常に話し合いながら預かるようにしてい

ます。また、一時保育で預かり始めた子どもが、状況の変化から入園となるケースもよくあります。

今年度も、母親の急病や失踪など一時保育では対応できない状況が起き、入園となった子どももいました。

当園の保育士たちはみな、一時保育の子どもを預かることも日常の保育の仕事のうちとってくれています。経験の長い保育士は、さらにその必要性もしっかりと理解して仕事をしてってくれています。一時保育の子どもを預かることで、子どもの心を理解していこうとする、保育の原点を常に考えなければならない状況に置かれます。自分を見つめなおすという機会も多くなり、保育士としての力量が益々高まっていくようです。

そんな実感もあってか、大変ながらもやりがいを感じ頑張ってくれているようです。そのような職員の前向きな姿勢は、職員間の思いやりにつながり、一時保育の子どもが多かったり、情緒的に難しい状況のときには自然と助け合う姿がうまれています。

それはセンター職員を含む保育士のみでなく、用務員、事務員、看護師やときには園長・理事長までもが関わり、みんなで支えています。

その基本には、やはり“子どもたち一人一人にとって大切なこと”“私たちはそのために仕事をしていること”という共通理解があるからだと思います。法人の理念・保育理念がしっかり伝わった職員の連携があるからこそ取り組んでいるのだと思います。

担当職員の意見

1歳児クラスリーダー

1歳児の保育室で一緒に生活していく中で、一時保育のお子様は少しでも同じ生活の場に居られるように安心できるまで側についてあげたり、遊び出せているときはその遊びが持続できるよう、周囲の子の環境を整えてあげるよう意識して目を向けています。一時的に預かるお子様、定期的に預かるお子様とそれぞれ関わり方は違いますが、一時保育を利用されるお子様はみなお母様と離れたことが少ないお子様が多いので、激しく泣いてしまう子もいます。そのような時には、保育室の担任だけでなく一時保育担当者であったり、センターの担当者であったりと、その子に合わせ一番安心して過ごせる場所をみつけてあげ、その中で職員同士が連携をとっていくことが大切だと感じています。

私たちが一時保育のお子様を預かっている中で、少しでも早く安心できるよう、お子様のことを知ろうとする思いがあり、昨日は食事が食べられなかったけど今日はすこし口に出来たなど、少しの間でもいろいろな変化があると嬉しく思います。

園児も見なれない子をみると気になり、傍に寄ったり、泣いていると玩具を持ってくるなどの優しいかかわりを見せてくれることもあり、このようなかかわりを大切にしてお互いが良い経験になれば良いと思っています。

預けていくお母様も不安でいっぱいだと思うので、朝は泣いてしまったけれども帰るときには少しでも変化があるよう、その子の楽しんでいた姿が伝えられるように接しています。

2歳児クラスリーダー

一時保育の子を預かるに当たってまず意識していることは、情緒の安定です。今まで家庭の中で母親などと一対一に近い関係で過ごしてきた子にとって、保育園というのは大きく環境が違います。初めて過ごす場所、大人、それに加えて、周りにはたくさん子どもたちがいます。そのようなところに来て、不安定になるのは当然のことです。事前に面接票などを参考にしながら、その子がどのような子なのかということを知っておき、母親から離れた不安から解放してあげ、自分の興味のある遊びに目を向けられるように意識しています。2歳ともなると、かなりはっきりと状況を理解していたり、意思もはっきりしている子が多いので、ただ気持ちをごまかすような関わりではなく、「いつになったら（何をしたら）お迎えにくるんだよ」というような見通しを持てるようにきちんと話しておくことも、大切なことのひとつだと考えています。そのようにして、個々に合わせて関わっていくことで、少しずつでも情緒が安定し笑顔が見られてきたときはとても嬉しく思いますし、自分の中でも充実感が得られます。

最近、一時保育の中には、子育てセンターを利用している子も多く、母親と一緒に園庭に遊びにきている子が多く見られます。つまり、クラスの担任とは信頼関係が築けていなくても、子育てセンターの職員とは信頼関係が築けており、はじめから無理してクラスの中に入るのではなく、そのような職員間でも連携をとりながら過ごせるようにしています。

ただ、情緒の安定を見ながら、少しずつ遊びなどを通して関わっていくことで安心感を促し、様子を見ながらクラスの中でも過ごしていけるように意識して関わっています。やはり、情緒の安定を図っていくにあたって、自分一人ではなく、保育園全体の連携がとても大切だと感じています。どの子どもにおいてもそうですが、自分のクラスだけという考え方ではなく、みんなで一人の子を守っていくという意識が安心感にも繋がっているようにも感じています。

次に心がけていることは、安全面です。集団生活に慣れていない子も

多く、保育園という場も初めてになるので、特に気をつけて目を向けていく必要があります。2歳児という年齢は、はじめはその他の子ども危険に対してかなり認識の薄い年齢なので、他児と同様に意識しやすいのですが、特に2学期以降になると他児がだいぶ意識できるようになってきた反面、大人の注意力も薄れやすくなっていることがあります。そのようなところでも、常に危険に対しては意識していく必要があると思います。集団生活においてルールということは必要です。しかし、一時保育で来た子どもたちは、今まで集団で生活する機会が少なく、ルールを守れず他児とトラブルになることも多く見られます。そのような時も、その子の様子を見ながら、無理に集団の中で遊ばず、少人数の落ち着いた環境で遊ぶようにしたり、他児と同様「かして」「いれて」など言葉で伝えることや順番などのルールを伝えるようにしています。はじめはまったくルールを守れなかった子が、少しずつそのような経験を重ねていくことで、ルールを守れるようになっていたり、他の子どもとも仲良くなっていく姿も多く見ることができ、個々の成長も感じ嬉しく思うことも多々見られています。

生活面においては、特に排泄や食事において気をつけています。排泄に関しては、ほぼ自立している子がほとんどですが、未だに排尿が見られずオムツで生活している子もいます。しかし、「一時保育児だからいい」という訳ではなく、一人の人間としてしっかりと成長を促していきたいと思っています。もちろん母親とも連携をとりながらですが、はじめはトイレに行くことも嫌がっていた子が、現在ではトイレには無理なく座れるようになりました。

食事に関しては、様々な面で気になる子が多く見られています。やはり、家庭での食生活の影響が大きいのでしょうか、偏食であったり、好きなものしか食べない、フォークの持ち方や姿勢が曖昧といった子が多いです。そのように考えていくと、いかに乳児期から食生活においてきちんと関わってきたかということが、その後の生活面においても大きく影響するところが大きいのではないかと思います。

最後に一時保育においても、家庭との連携ということは大切だと考えています。子どもたちも保育園というところは初めてでしょうが、両親にとっても初めてという方が多く、不安に感じているのだと思います。連絡票に一日の様子を書くことはもちろんですが、お迎えの際により細かく様子を伝えることで安心感が得られたらと思っています。やはり、離れるときは激しく泣いていても、お迎えのときの子どもの笑顔を見たときのお母さんの顔は本当に嬉しそうです。そのような笑顔は自

分にとっても大きな力となっています。一時保育というのは、一回だけの利用から、週 2～3 回の利用、また数ヶ月に一度の利用など利用形態は様々ですが、どのような場合においても、それぞれの子どもにあった形で保育できることが一番だと思います。そのような中で、少しでも心が通い合ったり信頼関係が築けたり、成長を感じられたりといった姿が見られたときは、とても嬉しく思います。ただ場を提供するだけでなく、そのような姿を感じられるよう心掛けながら保育していきたいと思っています。

一時保育担当保育士

支援の一環として一時保育があります。在園児の保護者と違って利用児の保護者のニーズに合わせて利用できるようになっていきます。利用の内容は仕事であったり、身内の方の介護や看護、通院や心因的要因のある場合など様々です。家庭の事情により預けるところもなく、かといって子どもを連れて行くと中途半端になってしまうなど悩みも多いようです。本当ならば保育園に入りたいと思っても、すぐには空きがなかったりなど、現状は厳しいようです。本当に困っているときに一時保育を利用しているようです。私たちもそんな保護者の心の悩みに少しでも支援できたらという思いです。保護者の方々も突然の心配事や生活の変化で困惑している中に加え、お子様をはじめ園に預けるというのも非常に不安であるという事が手に取るように感じられます。あたたかく迎え入れ、話しやすい雰囲気にも心がけ、不安を少しでもなくしてあげられる様に配慮しています。お子様を安心して預けていただけるようになれば、保護者の方々の不安も和らいでいくのだと、日々の表情の変化からもうかがうことができます。

「仕事に打ち込めます。本当に助かります」障害児をもつお母様からは「下の子を園に預けることで障害児の兄にじっくり関わることができます。本当に感謝しています」というあたたかいお言葉を頂きました。保護者の方を少しでも支援できるということがとても嬉しく、やりがいのある仕事だと思っています。お子様も同じく、保護者の仕事や介護などの間、大人の都合でどうしても振り回されてしまったり、その時間、充分に関わってはもらえなかったりと満たされない部分も出てきます。一時保育は、保護者の方の支援であると共に、お子様にとっても支援であると思っています。忙しい時、園に来ることで楽しい時間、充実した時間である方がより良い保育となるでしょう。

しかし、はじめての集団生活、今までずっと一緒だった保護者とはじめて離れて過ごすことは、お子様にとっても本当に不安なことです。

まずは、お子様にとって安心できる場になることを一番に考え、その不安な気持ちをしっかりと受け止めながら、その子に合わせて丁寧に関わるようにしています。勿論、不安なお子様は対面で安心できるように関わりますが、慣れてきたお子様は個別の関わりよりも、同年齢の友達の中にいる方がより多くの刺激を受け、成長していく姿も感じられます。言葉が増えた子、友達関係ができて社会性が見られるようになった子、家庭ではオムツでの生活だったが、園に来てパンツに切り替えられたり、他児を見て嫌がっていた便座にもスムーズに座れるようになったりなど、集団生活がプラスになった例もたくさん見られます。又、小さいお子様では、家では抱っこばかりされていたのか、運動発達面で気になる所が見られていましたが、園で腹這いあそびを意図的に取り入れることで運動面が促され、動きが活発になったり、家庭では瓶詰めのベビーフードばかり食べていたせいか、咀嚼が気になっていたお子様も、園に来るようになってからしっかりとした離乳食を始められるようになったなど、様々な面で良いきっかけとなったお子様もいます。保護者を助ける支援といっても、ただ預かるだけの保育ではなく、お子様にとってもより良い時間、今、その子にとって必要な関わりなど、専門的な見方で関わっていくことも大切なことと思っています。一時保育だからといっていい加減な関わりをするのではなく、在園児と同様、ひとりの大切なお子様として同じように関わるようにしたいと考えています。

継続的にお預かりしているうちに、子育てについて相談されてくる方も多くなりました。家庭だけで育てていたこともあり、わからないことや悩みもあるようです。

園側からお子様の様子を伝え、安心して頂くと共に、気になる部分については保護者が心配しないよう配慮しながらも、家庭ではどうしているか、など具体的に聞いていくことでお子様の姿がよく見えてくるので、家庭の様子を知るのには良い手がかりとなります。園側からの話のきっかけが子育てについての相談へと広がり、良い窓口となりました。又、お母様の悩みによっては、育児講座への参加をお知らせするなどして保護者の方への育児支援としても協力できるようにしたこともあります。「関わり方を変えてみました」「気になるところがなくなってきました」「動きが活発になりました」など、保護者からも子育ての話題が多く聞かれるようになったこと。又、園側から持ちかけたお話が、保護者の方の関わり方を変え、又、その関わりによって良い方向へと成長していくお子様の姿などが多くなり、本当に嬉しく思

います。保護者にとって、はじめは事情による一時保育利用でしたが、園に来ることがきっかけで様々な面による子育て支援としてつながっていくことは、本当に素晴らしいことだと思っています。お子様にとっても保護者の方々にとってもプラスとなるよう、これからも一時保育を考えていきたいと思っています。

研究結果のまとめ、今後の課題と展望

今回の研究では3ヶ月間という短い間ですが、一時保育事業そのものが様々な方向から子育て支援をしているという実感を得ることができました。

事情があり子どもを一時的に預かっているだけでなく、その預かった時間は、沢山の支援につながっていることが分かりました。子どもの育ち、親の不安、親育て、又その後の在宅育児への励みにもつながっているようです。保育園が一時保育をしていくことの子育て支援としての深みを感じています。また、職員の連携、共通理解がないと出来ない事業であり、当園の職員たちの保育士としての使命意識の高さ、また他職種間においても子育て支援に対する意識の深さを改めて感じる事ができました。それは大変嬉しく感じると同時に、誇りに思っ今後大切にしていきたいと思いました。

最近では、一時保育は親のためのものとしての認識が高いように感じます。でも取り入れ方によっては子ども達の最善の利益にもつながっていくようです。子育て支援とは、子どもにとって最善の利益となり、親にとって今後の子育て意識の向上につながっていくものでなければいけないと思っています。親の気持ちにしっかりと寄り添いながら、子どもの育ちを見守る姿勢でありたいと考えています。

今後も本来の子育て支援とは何をどのように支援していくことなのかを、一組一組の親子に合わせて考えながら進めていきたいと思っています。

結果と考察

問1 「育児について保育園に相談した事がありますか」について

育児について相談する対象についての問いであるが、「保育園に相談する」と回答した保育園利用者は58%、一時保育利用者は44%であった。この結果については保育園に子どもを預けている保護者に於いて、相談する場や機会が身近にある事、またお便り4%などを通して育児情報を目にすることが多い事から、育児について考える機会や保育園への相談意識を高めているのではないかと考えられる。

一方、一時保育利用者は、相談したくても相談する場や機会が少ないこと、保護者が育児に対して疑問や問題を感じなければ、相談の必要性が発生しな

いということもあるのではないだろうか。

相談方法については、何れの利用者に於いてもそれほど違いは見られなかった。

問2 『子育てへの社会の関わり』について

結果は、保育園利用者は選択肢3の「近所付き合いなどの人間関係が子育てには必要である」と答えている割合が38%ともっとも高く、続いて選択肢4の「福祉制度などを中心に、社会が幅広くサービスを提供すべきである」の答えが34%と続いている。一方、一時保育利用者においては、選択肢4の「福祉制度などを中心に、社会が幅広くサービスを提供すべきである」と答えた割合が56%、選択肢3の「近所付き合いなどの人間関係が子育てには必要である」と答えている割合が19%であった。

選択肢4の保育園利用者の38%と一時保育利用者の56%の違いは、日々、保育園という福祉制度を利用している保護者と、一時保育のみ利用している保護者との福祉充実に対する要求度の現れと取ることができるのではないだろうか。一時保育利用者に於いて近所付き合いなどの人間関係を重視せざるを得ない状況にあるにも拘わらず、選択肢3の割合が低いのは、選択肢4の割合が影響しているものと思われる反面、核家族化が進む中、近所付き合いなどの人間関係を形成できないことが、逆に子育てを福祉制度に頼らざるをえない状況を保護者自身が作っているとも考えられる。

また、選択肢3を選んだ保育園利用者は38%と、一時保育利用者の2倍近くの割合を示しているが、これは保育園を利用している安定感が土台にあって、さらに近所付き合いなどの人間関係の必要性を感じていると回答したことが推測できると、保育園を利用していることで、子どもだけでなく親同士の近所付き合いや交友関係が広がったことが影響しているものと考えられる。全体的な傾向として、何れの利用者も保育園制度を中心とした福祉制度の利用欲求は高い傾向にあり、「子育ては家族が中心になってすべき」と考えている割合は25%、19%と低い数値を示しており、社会的風潮を伺うことができる。

問3 「あなたは普段、子育てについてどのように考えていますか」について

選択肢2「楽しみや喜びを感じる」、選択肢3「義務や責任を感じている」と答えた保護者が何れの利用者に於いても大半を占めているが、保育園利用者に比べ、一時保育利用者に於いて選択肢2の「楽しみや喜びを感じる」割合が低く、反面、選択肢3の「義務や責任を感じている」と答えた保護者は一時保育利用者において高い割合を示している。

この事からは、一時保育利用者は、保育園利用者に比べ、子育て4%に対する負担やストレスを感じる事が多く、それが義務や責任を感じるという結

果につながったのではないかと推測できる。そして子育てに対する義務感や責任感が、子育てに対する楽しみや喜びを感じる機会を奪ってしまい、割合を下げているのではないだろうか。

一方、保育園利用者は、保育園を利用することで子育てに対する負担やストレスがある程度軽減され、それが子育てに対する一定の安定感を生みだし、保護者が子育てに対して、楽しみや喜びを感じるという意識を高めているものと思われる。また、全体的に見ると 15%と割合は高くないが、一時保育利用者において選択肢 4 の子育てについて「負担や苦勞を感じる」を選んだ保護者は保育園利用者の 3 倍の割合を示しており、育児に対するストレスを感じやすい状況にあることが浮き彫りとなった。